

人の心から出てくるもの

イザヤ書 29:13~16

マルコ 7:1~23

私共の使っている法律もそうですが、神の律法を守るにあたっては、やはり施行細則と言うのが必要になってきます。またそれだけでも十分でない場合には口伝えで決まり事を保っていきます。そうなりますと生活するにあたっては非常に煩瑣なこととなってきます。本日の新約の聖書箇所でも神の掟という語は単数形ですが、人間の戒めは複数形となっています。それはやはり神に正しく仕える真実な内容と言うのは一つであるが、人間の作りだす伝統というのはさまざまであるということの意味しているのでしょうか。ここで律法学者たちは、イエスさまの弟子たちが食事の前に手を洗わなかったことをとがめています。これが昔の人たちからの言い伝えに従っていないということでした。このことは別段今初めてのことでなかったでしょう。すでにイエス様たちは男だけで5千人、女子供を合わせると1万人以上いた群衆と食事した時は、青草の上でしたので、おそらく手を洗うことはなかったでしょう。実際に手を洗うことは不可能であったことでしょう。しかしそれに対しても律法学者やファリサイ派の人たちは、律法や言い伝えを遵守するという考えであり行動してきた人たちです。昔の人たちの教えに従って清めの定めを守ることだけが、聖なるものを守る生き方であると確信していたからです。ですから普通の人にとっては、煩雑過ぎて事実上守ることが不可能であったことを、律法学者やファリサイ派の人たちからの視点で裁かれて断罪されたのです。

さて私どもがここで考えなければならないのは形式と内容についてです。信仰を守り続けるためにその現れとして形式を保つのは良いことです。信仰は何かしらの形をとるでしょう。その形式を守り続けること自体は決して悪いことではないのですが、しかししばしばその形式だけが独り歩きして行き、内容が分からなくなったり無くなったりすることがあります。でもただ形式を守っているということだけに矜持があって自分たちは他の者たちとは違うというエリート意識を持ち出したのが、律法学者でありファリサイ派の人たちです。信仰という内容がない形式的な行動には意味がありません。さりとて形式がなくても信仰という内容だけあればよいではないかとうのも違います。どんなに味の良いケーキでも形がぐちゃぐちゃでは食欲がわきません。私どもが形式を守って行こうとするのは、その内容である信仰を豊かにするためであり、しっかりさせるためであります。主なる神様は信仰の形式をなくてもよいと言ったり無視したりするお方ではありません。行いという形式の中に信仰心という本質を入れて、全人格を主なる神様にささげるのが信仰者の生き方です。

またイエス様は神の掟の十戒の一つを例に彼らの形式主義を非難しています。つまり「父と母を敬え」という第五戒ですが、これが重要なのは誰もが知っています。ただ、昔の人たちの言い伝えである「コルバン」と言う告白により、ささげる物は父や母でなく神にということとその義務は免除されるというのを逆手に取ってしまっているというのです。その上神にささげるべきなのにそれもしないでいるということ、そのような悪を指摘しています。つまり自分自身のために昔の人たちの言い伝えを利用して、本来の神様の教えや戒めとはかけ離れたことをしているということなのです。

そもそもこの場面での問題提起は、食前に手を洗うかまた食器を洗うべきかということでした。洗うという言葉は洗礼バプテスマと同じ言葉です。ですから言ってみればここで汚れるというのは何も衛生観念からの視点ではなく、神との関係から見て聖くないということ、すなわち神様から分離された状態であるとい

うのがこの意味です。イエス様とその弟子たちはこれについては自由でありました。決して神様との関係を見死しているというわけではありませんが、その昔の人たちが決めた束縛から自由であっても、神様との関係は壊れない、信仰は保っていられるということでした。

その理由をイエス様はお話しされました。なぜなら口から入る食べ物は、心の中に入らずに腹に入って外に出るものだからというのです。ですから心を汚すことはないのです。「外に出す」というのは所謂トイレに行くということです。それで「清い」と言われています。この「清い」という語はカタリゾーという言葉ですが、私どももよくカタルシスという言葉を書くかもしれませんが、その語源です。カタルシスと言うのは精神的な浄化のことを言います。もやもや鬱々していたのがすっきりすることです。私が大阪で一度いのちの電話の講習会に参加した折に、講師の先生からカタルシスと言うのは精神の浄化を意味するが、英語ではまた別の意味があることを言われ、それは排泄だということを教えていただきました。トイレに行って身も体もすっきりする気分になることそれもカタルシスだと言われました。イエス様がここでトイレに行って全部外に出して「清い（カタリゾー）」と言うのは文脈は違いますが、面白く読みました。

では何が人を汚れたものとするのか。それは外から来る食べ物ではないのです。自分の心の内から出るのが汚れているのです。イエス様が挙げられた多くの悪徳は思いだけでなく行動も含んでいます。ですから悪い思いも悪い行いもすべて人の心の内から出るということです。人はある意味悪いことしか考えないと言うのも一理あります。実際によいことをするというのは物質的にもエネルギーの面からも本人にとってはマイナスだからです。何かしら本人の命を削ってすることが、外に対してよいことなのです。そういいますと悪いことというのは自分の欲望や思い、利益を考えそれがプラスになるようなことです。でもそれは人が生存するためという観点からは起こってくる思いかもしれません。しかし人は独りで生存しているわけではなく他者との関係において社会の中で生きているものですから、その思いを通すことがすべて有利かということにはなりません。ですから人が生きるために起こってくる自己肯定、自己中心的な思いから生じる様々な思いを内省していくことです。そこに目を向けさせてくださるのが聖霊の力であり、その悪しき思いを抑えて聖い思いで満たしてくださるのが聖霊の力です。

律法学者やファリサイ派の人たちは新しい勢力であるイエス様たちの教団をほうってはおけず、わざわざエルサレムから地方のガリラヤまで来ていました。自分たちの獲得している特権的な地位が脅かされるのを危惧していました。イエスさまの言葉尻や脇の甘い弟子たちの落ち度を捜しつつ追っていたのです。彼らはイエス様に対し、先生と言ったり丁重なそぶりで尋ねますが、その内実は、何とか陥れようとしているのが本音なのです。このように建前と本音が乖離している形式主義に対してイエス様は彼らを白く塗られた墓の様だとも言われています。見た目にはきれいですが、その中身は腐敗しているのです。

しかしわたしどもも外側の自分と内側の自分が乖離するということはまれではありません。信仰においては特に注意したいものです。私どもが唱和している信仰告白であったり、十戒や主の祈りが形式的に唱えられてはいないでしょうか。それらの意味するところを一語一語吟味し理解してそれを体現化していきたいものです。

今わたしどもはコロナ禍にあってお互いになかなか顔を合わせることもできませんが、同じ信仰の群れとして慰め合うとともに信仰において形式主義に陥らないように切磋琢磨して、共に歩み続けましょう。